



（平成27年2月27日、龍山森林文化会館で開催した「龍山調査・現地報告会」の様子）

学長特別研究実績報告書

浜松市の中山間地域における空き家の利活用を めぐる社会学的研究 ：天竜区龍山町（旧・龍山村）を事例として

目的・概要

浜松市の中山間地域では、人口減少に伴い、空き家が増加している。空き家は、周囲の景観を損ね、野生動物の住処になるなど、深刻な問題になりつつある。その一方で、田舎暮らしを希望する都市住民は、このような中山間地域にある空き家の利用を望んでいる。しかし、実際、その利活用は進んでいない。そこで本研究では、具体的に浜松市天竜区の春野地域と龍山地域における空き家の状況を調べ、そのうえで空き家に対する地域住民の考えを明らかにし、空き家利活用の可能性と課題を示す。

期間

平成25年4月1日 ～ 平成27年3月31日

研究担当者

文化政策学部 文化政策学科 准教授 船戸修一

スケジュール

H26年4月～H27年2月	龍山地域における自治会長や自治会関係者への聞き取り調査
H26年2月28日	春野地域における自治会長へのアンケート調査
H26年4月～H27年2月	龍山地域における自治会長や自治会関係者への聞き取り調査
H27年1月	龍山地域における全戸対象にしたアンケート調査
H27年2月27日	現地（龍山）での調査報告会

研究成果

ここでは龍山地域の事例について述べる。浜松市による自治会長へのアンケート調査では、龍山では48軒の空き家が（外から判断して）利用可能な状態にあるという。こうした空き家に関して龍山住民（349世帯）へアンケート調査を行った。その結果（有効回答数131人）を分析すると、約半分が不審者の滞在、野生動物の住処、景観の悪化などを理由に問題だと認識している一方、問題だと感じていない住民が半分弱いた。これは各家離れて住んでいる集落もあるため、空き家が問題として認識されにくい背景があると考えられる。また、その対処について尋ねたところ、3分の1以上の住民が撤去して欲しいと答え、4分の1の住民が新しい入居者による利用を望んでいた。さらに、龍山外に住んでいる出身者（488人）へアンケート調査を行ったところ、有効回答数290人中15人の方が、現在、龍山に空き家を所有していると回答し、その4分の3は撤去を考えていないことも分かった。その理由として「お墓や仏壇があるため」「物置として利用しているため」という理由をあげた出身者は約半分弱を占めた。利用頻度の差はあれ、龍山出身者が空き家に有用性を見出している現実がある。また有用性を見出していなくても、処分するには金銭的な負担も生じるため、空き家は放置されたままである。一方、地域住民が集落の空き家を処分したくても、個人の所有物であるため、勝手に処分することはできない。このようにして空き家は、使用状況にかかわらず、集落内に残り続けてしまうということになる。そこで、この問題解決には、まず集落内の住民と現在は龍山外に出ている出身者と空き家利用についてコミュニケーションを図っていくことが必要である。田舎暮らしを希望する都市部の人たちにとって、中山間地域の空き家は魅力的である。このような空き家を所有者と連絡をとったうえで「集落ぐるみ」で利用斡旋すれば、集落で移住者を確保することも期待できる。そうなれば、空き家問題だけでなく、人口減少の問題の解消につながる可能性もある。空き家を個人の所有物という「私」領域の問題に押しとどめるのではなく、集落全体で解決していくことが求められている。以上のような調査結果を今年の2月27日に現地で開催した調査報告会で発表した。

今後の研究成果の 還元方法

今年度からは天竜区佐久間地域（旧・佐久間町）で調査を進めている。旧・佐久間町は、1956（昭和31）年に山香村・城西村・佐久間村・浦川町が合併した地域である。今年度は「山香・城西地区」、来年度は「佐久間地区」、再来年度は「浦川地区」を調査し、3年かけて佐久間地域全体の調査を行う。また自治会単位ではなく、その下部組織である「組」や「班」単位で聞き取り調査を行っている。中山間地域では、標高の高低差、国道へのアクセス時間など、地理的条件が違えば、同じ自治会でも意識や考え方に相違が見られる。よって「組」や「班」単位で調査した方が空き家の現状についての細かいデータを得ることができる。12月には、全戸対象ならびに佐久間出身者へのアンケート調査を行い、来年2月末には現地で調査報告会を開催する予定である。こうして調査から得られた知見を地域住民の前で発表し、今後の地域づくりに資するような形で地域還元を図る。